

— 資料7 —

私は現在長崎大学留学生センターで留学生に日本語を教えています。大学の学部時代には、今の様な職業に就くとは想像もしていませんでした。今の様に留学生の数も多くありませんでしたし、第一日本語教師という職業が存在することすら知りませんでした。あの頃の私は公共図書館で視覚障害者サービスに従事するつもりでした。

私の大学院での専門は日本語教育ですが、学部の専門は社会福祉でしたから、今でも留学生教育に対する基本的な姿勢、考え方は社会福祉的な視点に立っているように思います。

学部時代、授業で先生方が共通して言っておられたことは、「共に歩む」ということでした。ノーマライゼーション(Normalization)の考え方です。ノーマライゼーションというのは、障害者は障害者施設に、老人は老人ホームにという隔離主義ではなく、全ての人が分け隔てなく、ごく普通に一般社会(地域社会)へ参加していくことができるように日常的に触れ合いながら暮らしていくことができる社会に、という考えです。誰かを自分達の住む地域社会(コミュニティ)から、選別・隔離・排除しておいて、同情や憐憫、一方的な慰問や援助をするのではなく、同じ地域社会の一員として積極的に迎え入れる努力をすること、その中で、共に生き、支え合い、学び合う相互的な関わりを育てていくことを指します。この誰かというのは、いわゆる一般的に福祉の対象として考えられる人達だけではなく、なんらかの形で社会的にハンディキャップを持つすべての人を含みます。私は留学生もこの中に入ると考えてきました。

日本でも家族扶助機能の低下、近隣社会の連帯力の希薄化等によって、現代社会の中で孤立した状況に置かれている人が増えています。留学生は言葉のハンディとともに、自国で持っていた自分を支えてくれるネットワークを、ほぼすべて失った状態で日本という異文化の中にあります。地域社会及び大学内においても、孤立している留学生が多いのです。国際交流活動も盛んになってきて、日常的な交流も行われるようになりましたが、まだまだその場限りであったり、表面的なお客扱いの交流に終わってしまっている場合も見受けられます。留学生からも、「日本人は親切ですが、友達になるのは難しいです。」という声を耳にします。いつまで経ってもお客様(外国人)としてしか扱ってもらえないのです。差別や偏見も存在します。学生から実際に受けた差別の話や聞かされた話、そんなことは絶対に許せないという私ですが、さて、自分の中に差別や区別する気持ちは何もなくありませんでした。自分は学生の立場になって考えていると思いながら、知らず知らずの内に、日本的な考え方を学生に押し付けていることは、なかったのでしょうか。授業のやりかたでも、いわゆる教師の立場を維持しようと思わず教師風を吹かせていたことはなかったのでしょうか。

京都の民間の日本語学校で日本語を教え始めてから今までの間に、留学生との関わりの中で、それまで気づかなかった自分を発見し、ずいぶん色々なことを学びました。他人と関わり、そのことによって自分自身と関わって行くことは、時には人生を変えるほどの影響力を持ちます。人として人との関わりの中で変化していくことの面白さを私は知りました。

ここに私が非常勤講師をしていた頃、教育実習へ行った大学の後輩にあてた手紙を引用したいと思います。

授業はどうでしたか。人間相手ですから、しかも40人程の生徒を相手に、立てた計画どおりに行くはずもなく、(計画どおりに行くほうが変だと思いますが)墓穴を掘り続けて落ち込んでいるのでしょうか。それとも、思ったよりうまくいってほっとしているところでしょうか。

さて、憲法で保証されている最低限度の生活がおぼつかない

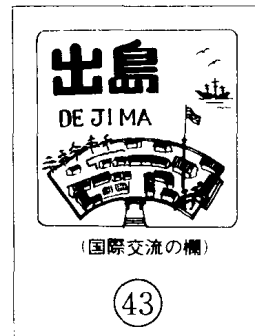
い状態にもかかわらず、私がずっとこの教師という仕事をつづけてきたのは、結局、人と人との出会いの不思議さと、出会って一緒に過ごすことができた時間への感謝の気持ちでしょうか。(それに、自分が意識していなかった自分との出会いもあります!)その出会いの中で、自分の固定観念(意識的なものも、無意識的なものも)をどれだけ崩してきたことでしょうか。というより、叩き壊してきたことというほうが適当かもしれません。そして、それによって変わっていく自分を、前よりも色々な考え方や生き方を受け入れて、少しずつですが自分自身から自由になっていく自分を感じるのには嬉しく、心楽しいものです。時に、学生とのかかわりの中で、学生の悲しみや怒りや悩みを受けとめ切れずに、つらい思いをすることもあります。同じようにその喜びも共に味わうことができます。大袈裟なことではなくて、毎日の授業で、「先生、よくわかった。うれしい!」と言ってもらえれば、気分はもう第七天国の世界です。きのう落ち込んでいた学生が、今日鼻歌でも歌っていれば、(それが、授業中であらうとも)もう嬉しくて授業の後にも思わずにたにた笑ってしまいます。歩きながら自分でも鼻歌を歌ったり、スキップまでしてしまうこともあります。その点で、私は非常に単純な人間かもしれません。2週間、大変でしょうが、気負わずに頑張ってください。結局この仕事、相手を受け入れることで自分の領域

(だと思っているもの)が侵される恐怖から、どれだけ逃げないでいられるかということが勝負のような気がします。

数え始めたばかりの頃、すぐ自己中心的になる私は、教師である自分が、たくさんの「助け」を必要とする留学生からいろいろなことを教わるとは考えていませんでした。ひたすら留学生たちに日本語を教える一方で、それまで馴染みの薄かった社会に触れ、様々な文化的背景を持つ人達について、少しずつ理解を深めていきました。

その中で学生から色々な相談を受けましたが、自分の非力さを思い知らされることばかりでした。特に非常勤講師として教えていたころ、自分自身の生活に余裕のなかった私は、日本語教育の現場で日々様々な国の異なった文化的背景を持つ学生を目の前にして、異文化理解、異文化適応の困難さを強く感じながら、生活面の問題については、ただ学生の話聞くことくらいしかできませんでした。生活面のケアというのは、ここまでということがありません。日常における継続的な支援が必要ですし、しかも留学生の抱える問題は多方面に渡っています。

長崎大学留学生センターに赴任して一年が過ぎました。現在、学内の先生方、事務の方々、日本人の学生達、地域の国際交流グループの方々などが、様々な形で留学生を支援してくださっています。今私は自分にできることを過大評価せず、かといって一人の力を軽視することなく、自分たちができる事柄、期待したほどではなくても実行している事柄を確認して、それをもっと大勢の人たちと分かち合うことができるようにしていけたらと思っています。大きなことを言うようですが、直接的な人と人との関わりの中で、同じ地域社会の一員として、助け合い、学び合いながら、異文化に対する感性を磨き、また人間としての共通性を見いだしつつ、「共に歩んでいける社会」を少しずつでも目指して行けたらと思うのです。



「共に歩む」ということ

留学生センター講師

松本 久美子